

『資本論』の体系と著述プラン

三宅義夫

はしがき

さきに拙稿「利子生み資本小論」において、そのはじめのところで註を入れて『剰余価値学説史』第三卷第七篇および『資本論』第三卷第五篇のなから四箇の文章を挙げ、そのさい、「総じて利子生み資本論、とくに信用論の立入った研究にさいしては、現在われわれの前に置かれているマルクスが書き残しているものと、マルクスの叙述プランとの関係を慎重に確かめておくことがきわめて必要なことであるが、そのことはこの小論の、しかも註などではないしうることはない。これについては詳細に別稿で取扱うことを予定しているので、ここではとりあえず右の句について注意しておくにとどめる」と記しておいたが（本誌昭和二十七年十二月刊第六卷第一号、三〇―一頁）、その「別稿」の一部が上の標題の本稿である。ここでは『資本論』の体系と著述プランといういわば全体についての概略的な考察を行う。主たる目的はマルクスにおける信用の取扱いを確めることにあるが、しかしそのことは本稿ではまだ以

下とり立てて表面には出て来ない。

マルクスの経済学体系における「プランの問題」は戦後になってからは方々で論ぜられているので、どういふ問題であるかをここで繰返してしるすまでもないと思われるが、かんたんに記しておく、一八五八年四月二日付エンゲルス宛の手紙でマルクスはつぎのように書いている。「最初の部分の短い概略はつぎのとおりだ。全体は六部に分かれる予定だ。一、資本について。二、土地所有。三、賃労働。四、国家。五、国際貿易。六、世界市場。第一章は四篇に分かれる。a、資本一般 (Kapital en général) (これが第一冊の材料である)。b、競争すなわち多くの資本の相互にたいする行動。c、信用、ここでは資本が個別的な資本にたいして一般的要素として現われる。d、(一躍して共産主義に移ろうとする)「資本の」もつとも完成された形態としての、同時にそのあらゆる矛盾をもつところの、株式資本。……」(この手紙はインスティトゥート版『経済学批判』の附録にも収録されている)。その翌年一八五九年に出版の運びとなった『経済学批判、第一冊』は「第一部、資本について、第一篇、資本一般 (Das Kapital im allgemeinen)」と記していたが、それはまだ第一章、商品、第二章、貨幣または簡単な流通だけを含んでいるものであって、マルクスはその末尾において「第三章は資本を論じてこの第一篇の終結を形成する」(インスティトゥート版、一八八頁。以下引用頁は同版の頁)と記していた。この第一章、第二章は、右のエンゲルス宛の手紙に先立つ同じ年の二月二十二日付ラッサール宛の手紙で「一、資本について (若干の前章を含む)」(この手紙も『経済学批判』の附録に収められている)と書いていたその「前章」であったわけであるが、のちに一八六七年に出版された『資本論』第一部、さらに現行の第二部、第三部は『経済学批判』当時の右のプランとどういふ関係に立っているか、ということが問題となる。これがいわゆるプランの問題である。

そしてこれにたいしては、『資本論』全三巻は右のうちの「資本一般」に当るものとする見解、「第一部、資本について」に当るものとする見解、「土地所有」「賃労働」等をも含んでいるとする見解、プランの改訂がその間にあったとする見解、などが存しうるのであって（註）、種々の考証が行われ、あるいはまた種々の「私見によれば」といったものが論ぜられているのである。

（註）マルクスにおける恐慌論の位置を明かにするためにプランの問題をとり上げ、この問題の解明についての精緻な研究を先鞭的に示された久留間敏造教授は、つぎのように記しておられる。「それについてはいちおう四種の見解が立ちうるように思われる。まず第一には、『資本論』三巻は経済学批判の全構想中の基礎的部分を形成する「資本」の中のさらに基礎的な部分——すなわち「資本一般」——に当るものとも考えられうるであろう。第二には、それは——その中にはすでに「競争」、「信用」等に関する固有の研究が含まれているとする見方から——いわゆる「資本一般」のみではなく、「資本」の全般に該当するものとも考えられうるであろう。第三には、さらに——『資本論』においてはただに「資本」に関する研究が尽されているのみではなく、労賃および地代に関する詳細な研究もまたすでに行われているという理由によって——『資本論』三巻はただに構想中にいわゆる「資本」のみではなく、さらに「土地所有」および「賃労働」をも包含するものであるとも考えられうるであろう。最後には、それは——『経済学批判』の中絶とともに本来の構想もまた全然変更されたものとする立場から——この最初の構想の全体にかわる、その全内容を包含する著述であるとも考えられないではない」（マルクスの恐慌論の確認のために）、昭和五年、『恐慌論研究』、昭和二十八年刊、六六一—六七頁。

いずれの結論においてもその結論にいたる過程、そういう結論とならざるをえないという理由がもつとも肝腎なことであるから、ただ結論がこうだといってもどうということもないのであるが、あらかじめここで記しておく、この拙稿では、かんとんにいうと、マルクスの著述プランは『経済学批判』を書いていた当時と『資本論』を書いていた当時とは全体の構想について大きな変更がある、という結論になっている。そして改められたものの方が前のプ

ランよりもいちぢるしくすぐれていると考えられる。なお、プランに大きな変更があり、『資本論』三巻——および学説史を加えて四部——はプランの上からはそれ自体で完結されたものであり（ただし現行三巻が原稿として完成されたものであるとか、また現行『剰余価値学説史』が学説史として完成されているとか、といった意味ではもちろんない）、著述プランとしては久留間教授のいわゆる「最初の構想の全体にかわる」ものといって差支えないものであるとしても、そのことがただちに、「その「最初の構想の」全内容を包含する著述」であるということにはならない。そうならないのは、とりもなおさずその間にプランの変更があったと見受けられるからである。

本稿はその主題の性質上ほとんどもっぱら考証をこととするので、独断を避けるためにマルクスの記していることをその意味をできるだけ正確に読取りつつ数多く挙示することが必要とされる。このため叙述は簡潔に、すらすらは運ばない。したがって考察の進め方の筋道を見失われぬようにお願いしたい。（といってもこの本号に掲載してある範囲では、長い註が二三入っているが本文ではまたただ一つのかんたんなことをいっているにすぎないのであって、筋道を見失われぬようにというのはもつと後の部分についてのことである）。

まず、『資本論』で叙述されている内容はどのような性質のものであるかについてマルクス自身がどのように述べているかを、『資本論』のなかから三つの文章を挙げて、見て見よう。

(一)、たとえば第三部の末尾の篇である第七篇「諸所得とその諸源泉」のところできのうに述べている。「生産諸関係の物象化の、および生産代理者たちにたいする生産諸関係の自立化の叙述において、われわれは、いかに、諸

関連が世界市場、その諸景気、諸市場価格の運動、信用の諸期間、産業および商業の諸循環、繁栄と恐慌との交替、を通して (durch)、かれらにとって、非常に強力な、かれらを否応なしに支配する自然諸法則として現象し、そしてかれらにたいして盲目的な必然性として作用するかという、仕方様式には立入らない (gehen wir nicht ein auf die Art und Weise, wie……) (註一)。どうのよ、競争の現実の運動 (註二) はわれわれの計画外に横わってらるゝのであつた (weil die wirkliche Bewegung der Konkurrenz außerhalb unsers Plans liegt) われわれはただ、資本制生産様式の内的構造 (die innere Organisation) のみを、いわばその理想的平均におおつて (in ihrem idealen Durchschnitt) 叙述すべきであるからである」(三八八頁)。

見られるようにマルクスは、諸関連がここに挙げていような事柄を通して「いかに」生産代理者たちにたいして自然諸法則として現象し必然性として作用するかという「仕方様式」——つまり「競争の現実の運動」——について叙述することは「計画外」のことだといひ、「資本制生産様式の内的構造のみを、いわばその理想的平均において」叙述すべきなのだといっている。この指摘はそれが第三部の末尾で、第一部以来展開してきた「神秘的性格」の考察を要約的にしめくくって述べている文章の終りに当って (とはいへ、現行『資本論』がそれから成っている原稿の執筆年代順は第三部、第一部、第二部であるから、その他の準備原稿を別とすればこの第三部の原稿は、これらの一番さきに書かれているのであるが) いい添えられている指摘であるということから、とくに注意するべきものである (註三)。

(註一) 他の箇所でもここに挙げていような事柄を考察外だと断っている一例として景気循環について見ておこう。

マルクスは第三部第五篇第二十二章の冒頭でそこで行う利子率の考察についてあらかじめ限定を附しているが、その一つと

してここでもつぎのように述べている。「利子率が産業循環 (Zyklus) 中に通過する循環 (Kreislauf) は、その敘述のためには、産業循環そのものの敘述を前提とするのであるが、この産業循環の敘述もここでは与えられえない」(二三九頁)。またその二三頁後でつぎのように重ねて断り書きを附している。「近代の産業がそのうちで運動するところの回転循環——静止状態、活気の増大、繁榮、過剰生産、破局、停滞、静止状態、等々という、その分析を進めることはわれわれの考察外に属する循環 (Zyken, deren weitere Analyse außerhalb unserer Betrachtung fällt)——を考察するならば、ひとは、たいいて、利子の低位が繁榮または特別利潤の時期に照応し、利子の昇騰が繁榮とそれの転換との間の分れ目に照応し、極端な高利の程度に及ぶ利子の最高限が恐慌に照応する、ということを見出すであろう」(二三九四頁、傍点—三宅)。(なお、この後の方の引用文に見られるような、原則として考察外に置かれていた事柄であっても、ある問題の説明上——ここでは、利潤の大きさを規定する諸事情とこの利潤が貸付資本家と機能資本家との間で分配される割合を規定する諸事情とは異なるから、利潤率の騰落と利子率の騰落とはしばしば相反した動き方をする、ということの説明するためであるが——その事柄に触れている場合は、数多くある。景気循環についてもこのほか若干の箇所で闡説されている。しかし、こうしたことをもって、考察外に置くという原則が崩されていると見られるべきでないことは、いうまでもない。このことはまたのちに述べる)。

また第一部第四篇第十三章「機械と大工業」のところで、「われわれは、われわれの理論的敘述そのものによつてはまだ説き及ぼされなかった純事実的諸關係に、部分的に触れておこう」(一四七四頁)として、そのなかでつぎのような記述を与えている。「工場制度の尨大で飛躍的な拡大可能性とその世界市場への依存性とは、必然的に、熱病的な生産とそれにつづく諸市場の充盈とを生み出し、市場が収縮するとともに痲痺状態が起る。産業の生活は、中位の活気、繁榮、過剰生産、恐慌、停滞という、一連の序列に転化する」(一四七六頁、傍点—三宅)。(そこではまた一七七〇年—一八六二年にいたるイギリス綿業における景気変動について年表風な記述を与えているが、右に引用した文章は工場制度——世界市場——景気循環という一連の必然的関連性をその基本的な点において指し示している記述として、かんたんではあるがきわめて注目すべきもの一つである。「経済学批判への序説」(一八五七年八月九月執筆)に記しているプランの「五、世界市場と恐慌」において取扱う予定ではあるが重要な記述を与えているが、これも右のプランの「四、生産の國際的關係。國際的分業。國際の交換。輸出入。為替相場」との關係において注意されねばならない)。

(註二) ここで「現実の運動」としている *wirklich* は、*real* な、真の、本當の、といった意味で用いられているのであって、たんに実際の、という意味ではない。マルクスは *wirklich* という語をこの後者の意味で用いている場合もあるが、前者の意味で用いていることも多い。たとえば、「一商品の現実の価値は、その個別的価値ではなくて、その社会的価値である」(Ⅲ三三三頁)。「現実の貨幣——金または銀、すなわち、その質料が価値の尺度として役立つ商品——」(Ⅲ五五三頁)、「現実の貨幣はつねに世界市場貨幣である」(Ⅲ五八三頁)。等々。

(註三) つとに久留間教授が『資本論』の敘述内容の性質を「資本一般の——もしくは「理想的平均における資本家的生産様式の内的構造」の——論理的敘述」(前掲書、九七頁)と規定されたのは、きわめて適確であったといわれねばならない。とはいえ、ここで資本一般という語を用いられるのはこれだけの文章では問題はないが、教授は「現行の『資本論』はほんらいのプランにいわゆる『資本一般』に当るものである」とされてその間にプランはその骨子においては「変更されたと見るべき理由は存しない」という見解を採っておられるので(同上、九六頁)、そのことを考慮に入れて読むと、のちに見るように、ここで資本一般といっておられることにもかなり問題が生じてくることになる。

五、『資本論』の敘述内容の性質をマルクス自らが述べている例としていま一つ掲げておくと、第三部第一篇第六章「価格変動の影響」の第二節「資本の価値増大と価値減少、遊離と繫縛」の冒頭でもつぎのように述べている。

「本章で研究する諸現象は、それらを十分に研究するためには、信用制度と世界市場——これは総じて資本制生産様式の基礎および生活雰囲気をなす——における競争とを前提とする。だが、資本制生産のかかるより具体的な諸形態は、資本の一般的本性 (*die allgemeine Natur des Kapitals*) が把握された後にはのみ、包括的に (*umfassend*) 叙述されうる。のみならず、これらの諸形態の叙述はわれわれの著作の計画外に横わっているものであって、その続きが万一書かれることがあればそれに属する (*gehört seiner etwaigen Fortsetzung an*)」(Ⅲ三三三頁)。見られるようにここでも、「競争」と「信用制度」——これらをここでは資本制生産の「より」具体的な諸形態といっている——

—についての叙述はこの著作の「計画外」のことだとしている。そしてこの著作で与えようとしている叙述の性質は「資本の一般的本性」を明かにするものであるということを知ることができる。

なお注意すべきことは——こういうことについてはのちにまた述べるが——、「かかるより具体的な諸形態」について包括的に叙述されるのは「資本の一般的本性」が把握されたのちのことだと記すにとどめないで、そういったことの叙述は「われわれの著作の計画外」だということでもわざわざ断りをし、さらに「続き」にたいして etwaig とするような、もしかとか、万一に、という意味の形容詞を附していることである。こういうことは『経済学批判』や『剰余価値学説史』では見受けられない書き方であって、この間に著述プランの変更があったことを窺わしめるに足る一例たるものと見ることが出来る。

ここで附言しておく、右の文章に続けてマルクスはこう述べている。「とはいえ、右の標題に示されている諸現象はここで一般的に(im allgemeinen)取扱われよう。……これらの現象はすでにつきのことのためからも簡単に叙述されねばならないのである、というのは、これらの現象は、あたかも利潤の率のみならず分量もまた——この分量は実は剰余価値の分量と一致する——剰余価値の分量または率の運動から独立して増減しうるかのごとき仮象を生ぜしめるからである」(同上頁、傍点—三宅)。こうした取扱いは、本来であれば取扱事項として計画外に属する事柄を、叙述を完全にするために組入れている一例であって、さきにも景気循環の考察は原則として計画外であるが利率が利潤率の騰落と相反した動き方をするということの説明のために景気循環中における利率の動き方について一言していることを見たが、これらからすでに見られるように、『資本論』の叙述内容が「資本制生産様式の内的構造のみを、いわばその理想的平均において」叙述せんとしているものであり、「競争の現実の運動」は「計画外」と

しているが、これは貫かれている基本的方法であって、叙述を完全にするために必要なかぎりでは、ここから一步も出ないといったことが行われているわけではない。なお、エンゲルスは右の第二節の中に註を入れて、この原稿がマルクスによって書かれた以後「世界市場での競争」がいちぢるしく増大したこと、保護関税が新たに採用され、カルテルが形成されてきたことを挙げている。またマルクスは次節で「一般的例証」として一八六一—六五年の棉花恐慌を『工場検査官の報告』を引用して考察している。

(三)、マルクスはまた第三部の冒頭で第一部、第二部の研究対象と第三部のそれとのつながりを述べているが、そこで第三部についてつぎのようにいっている。「この第三部で問題とされるのは、……全体として考察された資本の運動過程から生じる具体的諸形態を発見し且つ叙述することである。諸資本は、その現実の運動においてはかかる具体的諸形態——これらの形態にとっては直接的生産過程における資本の姿態ならびに流通過程におけるその姿態は特殊の契機としてのみ現われる——をとって対応しあっている。かくして、資本の諸姿容は、われわれがそれをこの部で展開するように、それらが社会の表面において、種々の資本の相互の行動つまり競争において、また生産代理者たち自身の普通の意識において、その形態をとって現われるところの形態に、一步一步と近づくのである」(Ⅳ四七頁)。

ここで「具体的形態」といっていることをプランの「競争」「信用」を指しているものと解してはならない。この点注意を要すると考えられるので若干附言しておこう。競争、信用についていうときもマルクスは「具体的」関係とか「具体的」形態という語を用いているが——前掲の第三部一三二頁の文章でも「資本制生産のかかるより具体的な諸形態」といっているように(ここでは「より」がついているが)——、いうまでもなく考察は抽象的なものから具体的なものへとという方法を採って行われているのであって、たとえば、生産価格は価値よりも具体的諸関係を内蔵す

る具体的形態であるが、資本制の基礎上的の市場価格にたいしてはなお抽象的形態であり、生産価格にたいしてこの市場価格は具体的形態をなす。だから、具体的形態といっても、いわれている前後によってどういうことを指しているか判断されねばならない。ここでは、「諸資本は、その現実の運動においてはかかる具体的形態をとって対応している」その「具体的形態」を発見し敘述することを第三部の問題とするといっているのであって、その形態の下で展開する「現実の運動」そのもの——右にたいしてはより具体的な形態をなすところの——を考察するといっているのではない。この文章はそれだけを取出して読むと一見まぎらわしい上に、第三部においてはとくにそのなかで諸所で競争について論及されており、また第五篇では信用が論ぜられている、ということは間違いないところであるので、あるいは「現実の運動」を論じるといっているのではないか、という疑問が生じ易いのであるが、文章をよく見れば、「競争の現実の運動」、競争、信用という「資本制生産のより具体的な形態」についての叙述はこれを「計画外」としているといっている前掲の諸文章と異なることをいっているのではなく、一貫して同じことがいわれているのである。(註一)(註二)(註三)

(註一) 前掲の第三部八八五頁の文章が置かれている前でなされているところの、「神秘的性格」が第一部以来に展開され、考察されて来たかという要約的説明——そのマルクスの説明はかかる角度から第一部—第三部を俯瞰したものであってきわめて注目すべき大文章の一つである——を併せて読むと、右の第三部冒頭の文章でいっていることの意味を誤りなく理解するに役立つと考えられるので、その大要を掲げておこう。

われわれは——とマルクスはいっている——資本制生産様式のもつとも簡単な範疇たる「商品および貨幣」のところで神秘的性格を指摘した。だが資本制生産様式においては、そしてその支配的範疇をなす「資本」にあっては、この魔法にかけられ転倒された世界がさらに一そう発展する。資本をさしあたり直接的生産過程において考察するならば、この関係はまだきわめて簡単である。ついで流通過程が介入するが、これこそは、ここでは本源的な価値生産上の諸関係がすっかり背景にしり

ぞく一部面である。価値、ことに剰余価値は流通において実現されるにとどまらず、流通から生じるように見える。われわれは第二部では、この流通部面を、その生み出す形態諸規定にかんしてのみ敘述すること、そこで行われる資本の姿態の進展を指摘することにとどめざるをえなかった。だが現実においてはこの流通部面は各個の場合について見れば偶然によって支配されている競争の部面である。だがさらに、現実の生産過程は、直接的生産過程と流通過程との統一としては、新たな諸姿容——そこではますます次第に、内的関連の脈絡が消えうせ、生産諸関係が相互に自立化し、価値諸成分が相互に自立的諸形態において骨化しあう——を生み出す。

どのようにますます次第に内的関連の脈絡が消えうせ、生産諸関係の自立化が進むか、これはつぎのように考察される。剰余価値の利潤への転形、ここでは剰余価値は可變資本にたいしてではなく総資本に関連させられ、また利潤率は剰余価値率とことなつた独自の諸法則によつて調整される。こうしたことは剰余価値の眞の本性を、したがつてまた資本の眞のからくりをますます隠蔽する。利潤の平均利潤への転形、価値の生産価格への転形によつて、さらに一そうこうしたことが生じる。さらに、企業者利得と利子との利潤の分裂は剰余価値の实体にたいするその形態の自立化、骨化を完成する。利潤の一部分は資本家そのものの賃労働から生じるものとしてみずからを表示し、利子はそれ自身の独立的源泉としての資本から生じるかのように見える。資本はいまやそのもつとも疎外された且つもつとも独自の形態としての利子生み資本の姿態において、みずからを表示する。「資本—利子」なる形態は「資本—利潤」よりもはるかに首尾一貫している。というのは、利潤においてはまだその起源の思出が残っているが、この思出は利子においては消滅しているばかりでなく、この起源とはすっかり反対の形になつているからである。最後に、剰余価値の自立的源泉としての資本と並んで「土地所有」が剰余価値の一部分を一階級の手に委譲するものとしてあらわれる。この場合には剰余価値の一部分が「自然要素たる土地に結びついているように見えることによつて、剰余価値の源泉が完全に埋没されている」。

マルクスは以上のように第一部以来展開してきた「神秘的性格」の考察を要約し、ついでつぎのように述べている。古典派経済学は利子を利潤の一部分に還元し、また地代を平均利潤以上の超過分に還元する——かくして両者は剰余価値たることを同じくする——、また流通過程を諸形態のたんなる姿態変換として敘述し、最後に直接的生産過程において商品の価値および剰余価値を労働に還元する。こういうふうにして古典派経済学が諸対象の人格化と生産諸関係の物象化とを解きはぐしたことはその偉大な功績である。とはいえなお仮象の世界にとらわれており、諸々の未解決の矛盾に陥っている。現実の生産代理

者たちが、資本—利子、土地—地代、労働—労賃という現象の諸姿容——かれらがそのなかで運動し且つそれと日々かかわり合わねばならぬところの現象——をその觀念、表象においてもつことは自然だが、俗流経済学はこうした現実の生産代理者たちの諸表象を翻譯し、体系化すること以上に出ない。かかる三位一体的範式という現象形態——ここでは内的関連が消えうせている——の体系的叙述以上に出ない。^{* * *}

* これと同様な俯瞰が『剰余価値学説史』第三卷第七篇「利潤、利子および俗流経済学」の(四)「剰余価値の外面化」のところで、資本が、それが利子生み資本の形態において現われる以前に通過する道程を考察しよう」として行われている。そこでは、この利潤、利子、地代についての考察がつぎのようになされている。「利潤を完成する同じ過程が、利潤の一部分を地代としてこの利潤に対立せしめ、したがって利潤をば、剰余価値の一つの特殊の形態——これは、地代が土地に關連せしめられるのとまったく同様に。素材的に特殊な生産要具としての資本に關連せしめられている——たらしめる……。この眼に見えざるいくつかの中間体によってその「利潤の」内部の本質から切り離された姿態は、なお一そう外面化された形態、というよりもむしろ絶対的の外面化の形態にまで到達する。——すなわち、利子生み資本において、利潤と利子との分裂において、資本の簡単な姿態——この形態において資本は自分自身の再生産過程にとつて前提されている——としての利子生み資本において、絶対的の外面化の形態にまで到達する」(ディーツ版、五五九頁、改造社刊全集版訳、五五一頁)。この考察の仕方は、当時、現行第三部に当るものを第三篇「資本と利潤」とし、そこで平均利潤のすくつきに例として「地代(価値と生産価格との区別の例証)」を置き、利子をもつてこの篇をしめくくろうというプランを採っていたことと照応していると思われることができる。

* * 古典派経済学は「偉大な功績」をもつていたとともに大きな欠陥をもつていたことはいうまでもない。たとえ第三部第三篇「利潤の平均利潤への転形」のところでマルクスは、「ここではじめてかかる内的関連が暴露されている」とし、つぎのように述べている。「後述するところおよび第四部から人々が見るであろうように、従来の経済学は、価値規定を基礎として保持しうるために剰余価値と利潤、剰余価値率と利潤率、の間の諸区別を暴力的に捨象するか、さもなければ、現象上で眼だつ右の諸区別にしがみついたためにこの価値規定とともに科学的な仕方的一切の基礎を放棄した。」「競争戦のとりことなり、競争戦の諸現象をすこしも洞察しない実践的資本家は、仮象を通してこの過程の内的本質および内的姿態を認識することがまったくできないはずである」(Ⅱ一九三—四頁)。

同様なことは『剰余価値学説史』においてもくり返し指摘していることであるが、古典派経済学内でのスミスとリカアードの方法について第二部第一分冊のリカアード批判の冒頭において、つぎのように述べている。「一方ではスミスは経済上の諸範疇の内的関連を——あるいはブルジョアのな経済体系の隠れた構造を、追求する。他方ではかれは、これと並んで、競争の諸現象のなかに表面的に与えられているような、したがって、非科学的な観察者にとつて、それとまったく同様にブルジョアの生産の過程に實際的に囚われており利害をもっている者にとつて現われるような関連を併置する。この二つの把握の仕方——そのうちの一つはブルジョアの体系的内的関連のなかに、いわばその生理学のなかに突入するものであり、他の一つは生活過程において外面的に示されることを、その示され現われるがままに、ただ記述し、分類し、物語り、そして定式化づける概念諸規定の下におくにすぎないものである——は、スミスにあつては平気で並存しているばかりでなく、交錯しており、そしてたえず矛盾し合っている。……一方では、ブルジョア社会の内的生理学に突入しようという試み、他方では、あるいは外面に現われるこの社会の生活諸形式をはじめて記述し、その外面に現われる関連を叙述しようという、あるいはまたこれらの諸現象にたいして名称を見つけ、そして相応した概念を与え、つまりこれらの現象をはじめて言葉と思维過程において再現しようという試み。両方の仕事にたいしてかれは等しく興味をもつ。そして両者が互いに独立して行われるところからして、ここにまったく矛盾する表象の仕方が出てくる。その一つは、内的関連を多かれすくなかれ正しく表白するものであり、他の一つは、同じ正当さをもつて、そしてなんらの内的関連もなしに——他の把握の仕方となんらの関連なしに——現象する関連を表白するものである」(ディーツ版、二—三頁、全集版訳、一六—七頁)。かかるスミスの方法にたいしてリカアードの方法はつぎのごとき優越性をもっている。「ブルジョアの体系的生理学の——その体系的内的、有機的な関連と生活過程との理解の——基礎、出発点は、労働時間によつて価値が決定されるということである。そこからリカアードは出発し、そして科学に向つて、そのこれまでのしきたりを棄て、つぎのことについて答弁することを強要する。そのつぎのことというのは、この科学によつて展開され、叙述される他の諸範疇——生産諸関係および交易諸関係——がどこまでこの基礎、出発点に対応するかあるいは矛盾するかということであり、たんに過程の現象諸形式を複写し、再現するにすぎない科学が、したがつてまたこの現象そのものが、いったいどこまで、ブルジョア社会の内的関連、その現実の生理学がそれに基ずいており、またはそれを出発点としておられるところのこの基礎に対応するかということであり、いったいこの体系の外見上の運動と現実の運動との間のかかる矛盾はどのような状態にあるかということである。このことは、かくて、この科学にた

いするリカドの大きな歴史的意義である」(同上、三―四頁、訳、一八頁)。だが右のこのなかにもたまたリカドの方法の欠陥が横わっている。リカドの方法はつぎの点に存する。――かれは諸商品の価値の大きさが労働時間によって決定されるということから出発し、ついで、他の経済的諸関係や諸範疇が価値のこの決定に矛盾するかどうか、あるいはどこまでそれらがこの価値決定を修正するかを研究する。一見ただで、この仕方の歴史的な正当さ、経済学の歴史におけるその科学的な必然性、と同時に、その科学的な不十分さがわかる。その不十分さは、叙述の仕方のなかに(形式的に)現われているばかりでなく、誤った諸結論に導くものである、なぜならば、それは必要な中間項を飛び越して、直接的な仕方で経済的諸範疇相互間の一致を証明しようとするからである」(同上、二頁、訳、一六頁、傍点原文のまま)。

マルクスは古典派経済学のかかる欠陥を本質的に批判し、あらたな経済学を打立てようとしたのであって、当初のプランの六部作を『経済学批判』と呼んでいたのもこのことによるわけであった。そして「経済学批判」を今度は副題としている『資本論』においてはかかる古典派経済学の欠陥がすくなくともその基礎的部分においてなしとげられていること、見られるとおりである。

(註二) 高木幸二郎氏は論文「マルクスの経済学体系と世界市場恐慌」(『経済評論』昭和二十八年七月号所載)においてプランの問題を扱っておられるが、まずはじめにつぎのような結論を掲げておられる。――「諸氏が『資本一般』と區別して現行『資本論』のそとに予想する競争、信用、株式会社については、その一部は『資本論』の体系の中に含まれており、そのそとに残る部分は最後の世界市場論において、恐慌論との関連におけるその不可欠な内部的契機として展開されるべきものとみるべきであろう」(三三頁)。いまここでこの論文を取上げるのは、右の解釈を「考証的に明らかにする」として論じておられるなかで、上に掲げた三つのマルクスの文章のうち二つ、第三部一三二頁の文章と第三部八八五頁の文章とを重要視して挙げておられるのであるが、そこで氏が述べておられることが考証としていちぢるしく無理であると考えられるからである。

すなわち氏はまず『資本論』と『剰余価値学説史』とのなかで「競争」と「信用」という言葉を使っている箇所をいくつか挙げられ、ついで、「いわれている場合の『競争』や『信用制度』のそれぞれの意味を、いまままでより一そう具体的に検討してみる必要がある」(三五頁)として、まず第三部一三二頁の文章を引用される。そして第一にそれが書かれた時期を問題にされて、つぎのようにいわれる。――「それが一八六五年のものであることはエンゲルス註で明らかであるが、さらにおそ

らくは同年後期、すなわちクーゲルマン宛に資本論四部作出版の予定を書き送った十月前後のものであることはまちがいないであろう(一三六頁)。どういふ根拠から右のマルクスの文章が「同年後期」に書かれたことが「まちがいない」といわれるのか、高木氏はその根拠を示しておられないのであるが(ちなみに、かのクーゲルマン宛の手紙の日付は一八六六年十月十三日であるから氏は一年錯誤しておられる。しかしそれがかりに一八六五年であるとしても、別に根拠たうるものではないであろう)、そもそも氏はなにゆえに執筆時期をここでしかく問題にされるのであろうか。

ともかくその根拠は分らないが、氏はこのようにして執筆時期を「まちがいに」なく確定された上で、つづいてつぎのようにいわれる。——「この推測を基礎にして右の一文を見れば、そこにいわれている信用制度と競争が……『世界市場における信用制度と競争』として文字どおり『包括的』な意義において呈示されていることの独特の趣意を汲みとることができる」(三六頁)と。高木氏が「独特の趣意」を汲みとる「基礎」とするために右のような根拠の明かでない「推測」をされたらしいといふことは、ここからぼんやり察しがつくのではあるが、今度は、なぜこういふ「推測」を「基礎」にして見ると「独特の趣意」を汲みとることができることになるのだろうか。私には一こうに分らないのである。また氏はここで、前掲の氏の結論の後半(『資本論』のそとに残る競争、信用は世界市場論において展開さるべきものとみるべき、という)にとつてきわめて恰好な「世界市場における信用制度と競争」という表現がなされていると思われているが、この原文は *das Kreditwesen und die Konkurrenz auf dem Weltmarkt* である。氏はこの *auf* を信用制度にもかけて読んでおられるのである。一体「世界市場における信用制度」——いかえれば世界市場での信用制度——といふことはどういふ内容のあることなのであろうか、私にはこの箇所に関連してはその輪廓さえつきり分らない。それが示されないかぎり、ここは普通に、「信用制度と世界市場における競争」と読むほかないであろう。

このようにして氏はひとりで第三部一三三頁の文章から「独特の趣意」を汲みとつておられるのであるが、つづいて氏はこの「独特の趣意」に平仄を合せて、さらにつぎのような無理をつけ加えておられる。すなわち氏はいわれる、——「この角度にたつてみれば同章のやや後に『われわれの考察圏外に横たわる』とされているたんなる『競争』『信用制度』の言葉も同じ意味をもって使われたのであり、さきの場合の単純化的表現であることに問題はないであろう」(三六頁)。ところが同章のそれより前のところで、マルクスはつぎのように記しているのであって、これを見られれば明かなように氏の解釈は「問題はな」といふところではないのである、——「われわれの今研究においては、価格の騰貴または下落は現実の価値動搖の表現だとい

前提から出発される。だが、ここではこれらの価格動揺が利潤率に及ぼす影響が問題なのであるから、その価格動揺の原因いかんは事実上どうでもよいことである。だから、ここで展開されることは、価格が価値動揺の結果としてではなく、信用制度、競争、等々の影響の結果として騰落する場合にも、同じように当てはまる（Ⅱ二三四—一五頁）。

高木氏が「競争」や「信用制度」の——『資本論』で考察外としているところの——意味を「いままでより一そう具体的に検討」されるためにつぎに掲げておられるのは、同じく私が上に掲げた第三部八八五頁の文章である。ここでも氏はさきと同様に第一にそれが書かれた時期を問題にされる。氏によれば、この文章のすこし前第二部ではこれこれにかんじてのみ叙述することにとどめざるをえなかった云々と記していることは「注意を払う必要がある」のであって、こう記していることから「それが第二巻の原稿を少くともある程度は執筆しはじめた後のものであることが明らかであるから」第三部八八五頁の文章も「それが第三巻の地代論を扱ったなかに見出されたものであるにかかわらず、やはり第三巻中の執筆部分としてもっとも後のものであることは疑いないところであろう」（三七頁）と断定される。

* 高木氏のこの文章にかんじては前後を見ればまちがいを来すことはないが、ここでつけ加えておくと、プランを考察するさいにはとくに Buch（部）と Band（巻）とをはっきり区別しておかないと無用の混乱をひき起し易い。一八六六年十月十三日付のクーゲルマン宛の手紙でマルクスは、「わたしの事情のために、最初考えていたように両巻を一度にではなく、第一巻をまず出さねばならない。また、いまのところ、おそらく三巻になるであろう。……第一巻は、はじめの二部（資本の生産過程」と「資本の流通過程」）を含む」（傍点—三宅）と記している。第一巻が第一部だけを含むことが告げられているのはその後であり、またそれからは晩年まで第二巻には第二部と第三部とを含める予定であった。

地代論の第六篇にせよ、第七篇にせよ、第三部のなかでの後の部分であることに大したちがいはなさそうであるのに、またそれがたとえ第三部の冒頭に書かれていようと末尾に書かれていようとどちらでもよさそうであるのに、なぜ氏は右のマルクスの文章が第三部のなかで「もっとも後のもの」であることを論証しようとしておられるのか、分らない。さきにもなぜ執筆時期を問題とされたのか分らなかつたが——「独特の趣意」を汲みとる「基礎」として氏にとっては必要であるらしいことだけは分るのであるが——、ここでも同様に分らないのである。だがこれらの分らないことを通して、氏がさきに一八六五年の「後期」と確定しようとしておられたことと、ここで第三部のなかで「もっとも後のもの」といおうとしておられることと、互

いに関連があり、おそらく同じことをいおうとしておられるのであろう、といったことは察しがつく。ちなみに、このマルクスの文章は「疑いない」といった氏の註索をまたなくても、はじめから最終篇たる第七篇の原稿中にあるのであり——氏は八七一頁でエンゲルスが附している註五二を見落しておられるようである——、また地代論中にあるが「もつとも後のもの」だと論証するには、そこでマルクスが第二部を云々しているということでは論証にはならないのである。第三部第一篇の冒頭の文章でもすでに第二部ではこうであったと述べているほか、以下第三部の諸所でそういう指示を与えているからである。だが、そういったことはここでは問わない。

氏はこのように執筆時期を詮索され、ついで「まさにそこで」「この「まさに」は氏の思考過程を見る上に看過されない。つまりまさにかかる第三部のもつとも後の文章にという運びである」「三宅」計画のそとに留保するとされた『競争の現実的運動』となつて現われる「諸関連」の説明のまっさきには「そうではないであらう。マルクスは諸関連がいかにこれこれ等を通して自然法則として現象するか云々といっているそのこれこれのはじめに世界市場を挙げていのである」「三宅」、「世界市場」と規定され」ていることを注意され、もつて一挙に、「この時期のマルクスの脳裡にある『競争』や『信用』とは世界市場ときりはなしがたいものとなつていことが示される」と断定される。「まっさきに」世界市場と記していることだけをもつて一挙に「マルクスの脳裡」を洞察されることが、事柄を「考証的に明らかにする」ことになるかどうか疑わしいが、氏はさきの「世界市場における信用制度と競争」という独自の訳と右のことをもつて、『資本論』のそとに残る競争、信用は世界市場論において展開さるべきものであるという結論を引き出す上のもつとも有力な根拠とされ、あとはこれを力として一図に見るものすべて世界市場論への「包括」を計られるのである。この結論の反面にはその他の競争、信用は『資本論』中にすでに基本的には含まれているということが存するわけであるが、この同じ第三部八八五頁の文章ではすくづつづけて、こういうことにはかわらないが、そのわけは「競争の現実の運動はわれわれの計画外に横わつているのであつて」と述べているのであるから、そして右のその他の競争、信用もまた「競争の現実の運動」でないものであるから、氏が右のような結論を引き出しておられるのは、一方で「マルクスの脳裡」を洞察する他方でこのマルクスが現に書いてい文章に気を留めないという、一方的な読み方を採つておられるといわれなければならないであらう。

ところで上来疑問として来たところの、なぜ氏がしきりに執筆時期を問題にされ、これらのマルクスの文章が一八六五年の「後期」乃至第三部のなかで「もつとも後のもの」といわんとしておられるのかということにたいしては、ここまで来て

おその理由が判然としない。ただこの点でさきの氏の文章のなかで注意をひくことは「この時期のマルクスの脳裡」といつておられることである。これによつて見ると、高木氏は、競争や信用がマルクスの脳裡において「世界市場とつきりはなしがたいものとなっている」時期がこの一八六五年の「後期」乃至第三部の執筆時期での「もつとも後」と思つておられるらしい。だが、なぜそういうことになるのかわからない。しかし高木氏には、執筆時期がこのときだということになるとそれを「基礎」にして「独特の趣意」を汲みとることができたり、「まさにそこで」「マルクスの脳裡」を洞察することができたりするのである。いつて見れば、論証さるべき氏の結論がまず基礎になって、それを基礎として結論が引き出されているのである。氏の論文は相当丹念に『資本論』『剰余価値学説史』等から問題箇所を拾い出しておられるのであるが、しかし氏が右のような操作をもつて「考証的に明らかにすることだ」とされていることは、どうにも私には納得がゆかないのである。

なお附言しておく、氏が世界市場云々といわれる第三部のなかで「もつとも後の」文章でも氏の説と衝突する文言——「競争の現実の運動」は「計画外」という——が記されていること前述のごとくであるが、第六篇では絶対地代論のところ——高木氏も前の方で「拾いだし」ておられるように——「この〔本来の〕独占価格の考察は、市場価格の現実の運動が研究されるころの競争論に属する」（Ⅲ八一四頁）と記している。さきに八八五頁の文章が第六篇の原稿の中にあるがそれにも「かわらず」第三部のなかで「もつとも後のもの」だということをしきりに論証しようとしておられたが、そういう論証の必要が右のような氏の説と衝突する文言の所在地域を避けようとしたものであれば、はなはだ芸がこまかいといわれねばならない。ところでまた他方では、第三篇や第五篇でも「世界市場」という語を見出されると、それにたいして「忘れてはならない」（三三五頁）あるいは「示唆的だと思われる」（三七七頁）といわれ、その片手落を意に介しておられないのである。

氏が世界市場に、そしてまた「世界市場と恐慌」に大きく眼を向けておられることはよく分るが、そしてこれに大きく眼を向けること自体は重要なことであるが——世界市場的観点が重要であればこそ、マルクスも当初のプランにおいてその最後について「世界市場」あるいは「世界市場と恐慌」と記していたのであり、また『資本論』でも商品、貨幣という前章を終えて資本についての本来の考察に入るさいに、「世界商業および世界市場は、十六世紀において、資本の近代的生活史を開始する」（Ⅰ一五三頁）という文句をその冒頭に置いているのである——、そのことと『資本論』のそとに残る競争、信用は世界市場論において展開さるべきものとみるべきかという氏が論証しようとしておられることの当否とは別の問題である。氏は「以上の論定を基礎にするならば」として終りに結論をつぎのようになり返しておられる。——「当初『資本一般』のそとに計画された『競

争』『信用』『株式資本』は、一方それらの基本的な部分が現行『資本論』の体系的構成のなかに組入れられるとともに、他方第三巻の先に引用した敘述をもつて示されるような『世界市場における』最も具体的な包括的な『競争と信用制度』としては、体系の後半において世界市場論とともに与えられうることとなったのである(四四頁)。この結論の前半については、氏がその論拠として挙げておられる文章を拙稿でものちに引用する折があるので、そのさいここに同様に註を入れて氏の解釈の当否を考察することとし、本註はまずここで打切ることとする。

(註三) 藤塚知義氏は論文「恐慌論と利潤率低下法則——資本論の体系と恐慌の論理」(『経済研究』昭和二十七年一月号所載)において、『資本論』第三巻が『資本一般』の論理の中に包括されるものではないことを立証するために、次の二点を指摘しておきたい(二三四頁)とされる。第一の点は、「資本一般においては『商品の価値と一致する価格が前提とされている』のであるから、資本論第三巻における生産価格と価値との乖離は、資本一般の論理ではあり得ないことが明らかであろう」ということであり、第二の点は、上の本文で最後に掲げておいた『資本論』第三巻冒頭の文章にかんするものであって、またそのさいこのように誤って解してはならないと注意を記しておいたそのことにまさに該当するものである。まず第二の点を見、そのあとで第一の点について附言しておく。

氏は、『剰余価値学説史』で「現実的恐慌はただ資本主義的生産の現実的運動、即ち競争および信用からのみ説明され得る」といい、「この記述の後にはじめて取扱い得る部分、即ち資本の現実的運動(競争および信用)」といていることを挙げられ、「これを『資本論』第三巻冒頭の次の言葉と対照すれば(「それだけでもう『三宅』第三巻がまさしく競争および信用を扱う部分を含むことが推論出来るのである」とされ、この第三巻冒頭の文章を引用してつぎのようにいわれる、——「即ち第三巻の問題は生産過程と流通過程との統一への一般的反省(それは『資本一般』の中においての『統一』である。前掲〔C〕および〔D〕参照)ではなくて、全体として考察された資本の現実的運動なのである。かくて『競争および信用』資本の現実的運動」『資本論』第三巻の問題」という関係が推定出来るのである」と。

氏の「推論」は見られるようにきわめて簡単なものであって、その「推論」の誤りは「対照」する他方の方、すなわち第三巻冒頭の文章を、第三巻では諸資本の現実的運動を論じるといっていることと解されたことに因るものである。そう解してはならないということはすでに本文で述べておいたとおりであり、また併せて註一を見られたい。だから右の氏の「推論」は、こうした解釈の一例、さらにこうした解釈の帰結する一例として掲げるとどめてもよいのであるが、これとかんれんしてことごと

いでにここで、氏が「資本論の論理の全体系を考察」するといわれているその考証の仕方をやや立入って見ておくこととしよう。(なお、さきに第三部冒頭の文章を掲げたさいにははじめの方を若干省略しておいたので、すこし補足しておく、「第二部においては、ことに第三篇において、社会的再生産過程の媒介としての流通過程の考察にさいし、資本制生産過程は全体として考察すれば生産過程と流通過程との統一であることが、明かにされた。この第三部で問題とされるのは、この統一について一般的な反省〔Reflexionen、熟考と云つたほどの意味―三宅〕を試みるということではありえない」とし、ついで「問題はむしろ、全体として考察された資本の運動過程から生じる具体的諸形態を発見し且つ叙述することである」云々と書かれている)。

藤塚氏が右で「参照」としている〔C〕および〔D〕とはいずれもマルクスの「プラン」であるが、〔C〕は長いので〔D〕の方を挙げよう。これは、一八五八年三月十一日付ラッサール宛の手紙で「第一分冊」の内容を告げているものであつて、そこでマルクスは「資本一般(資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一、あるいは資本と利潤、利子)」と記している。藤塚氏は右に見られたように「第三巻の問題」はこうした「資本一般」の中においての「統一」の考察では「なくて」といわれるのであるが、とするとここで「両者の統一」をいいかえて「あるいは資本と利潤、利子」といつていることにたいしてどう処置されるのであろうか、という疑問がただちに生じるであろう。「資本と利潤、利子」——この標題のもつ意味を藤塚氏は十分に理解しておられないようであるが、ただ利潤や利子をここで論じるといつているもの、というようにかんたんには解しても——は第二部では取扱われていなく、第三部で取扱われていることはいうまでもないことである。藤塚氏がこのラッサール宛の手紙を「参照」としておられるのはそのなかで「統一」と記していることを見よという趣旨であろうと思われるが、この「統一」はいいかえて「資本と利潤、利子」と記されているのであるから、「第三巻の問題」はこうした「統一」の考察では「なくて」といわれていることは、いいかえれば、「第三巻の問題」はこうした「資本と利潤、利子」の考察では「なくて」といつておられることになつてしまふわけである。氏はこれをどう処置しておられるのであろうか。

そればかりでなく、右で〔D〕を「参照」としておられるのであるが、『剰余価値学説史』の第三巻序文でカウツキーが紹介している第三篇「資本と利潤」のプラン——これは後述するように基本的には大きく異なるとはいへ、現行第三部と大分類似した構成を細目的に示している——も氏はプラン列挙のなかに〔G〕として掲げておられるのであるから、当然この〔D〕と〔G〕との間の関係に考慮が払われなければならない。「資本と利潤、利子」と「資本と利潤」といふ、およそ誰れの眼に

も見えるはずのこの両プラン間の関係について、氏は一体どういう考慮を払っておられるのであろうか。

「資本一般」の内訳としてマルクスが示している「資本と利潤、利子」のうちまず「利潤」が第三部で論ぜられていることは藤塚氏といえど否定しえない。だが利潤論が「資本一般」に入るとするのは、「『資本論』第三巻が「資本一般」の中に包括されるものではない」という氏の「論理構想」にとつては困る。そこで氏は第三部での利潤論を二つに分割することを計られる。はじめの方は「資本一般」に入るかもしれないが、後の方は「競争」に入るのだ、という工合にである。

ここで氏が最初に掲げておられる「資本論の論理の全体系」にかんする氏の「見解」を見よう。氏はいわれる、「私の見解では、『資本論』の第一巻（生産過程）と第二巻（流通過程）とが「プラン」の資本一般に当るものであつて、第三巻（総過程）の第一篇（剰余価値の利潤への転化）は、その帰結をなすと同時に、以下の論理の出発点をなすものであり、『資本論』第三巻の第二篇（利潤の平均利潤への転化）および第三篇（利潤率の傾向的低下の法則）は、『プラン』の競争に当り、第四篇（商人資本）および第五篇（利子生み資本）が、『プラン』の信用に当るものである。……かくて「プラン」の中の『資本』に相当する部分が完了して、『資本論』第六篇（超過利潤の地代への転化）は『プラン』の『土地所有』に該当し、最後の第七篇（諸所得とその源泉）は『プラン』の『賃労働』を含む最後の総括をなすものであると思われる」（三一頁、傍点―三宅）。

剰余価値一般にたいする利潤一般の取扱ひ——これはいいかえると価値にたいする生産価格を問題としているものである——をこのような形に分割することができることであるかどうかは別として、氏は見られるように第三部第一篇を「資本一般」の「帰結」であると同時にそれをこえる「以下の論理の出発点」であるとされることによつて、ともかく「利潤」にかんしては形の上だけにせよかろうじて切り抜かれる。ところが、「資本一般」にはまだ「利子」が入る、とマルクスはいつてゐる。「D」について氏はかくてつぎのようにいわれるのである、——「ここでは未だ利子が『信用』を前提する（?!）ことこの論理構想は出来ていなかったものと考えられる（「マルクス曰く、私は死ぬまでそういつた「論理構想」はできませんでした）」（三三頁）。

ここで氏がいわれていることは、一八五八年三月十一日にラッサール宛に「資本一般」の内容を告げた當時には、マルクスはまだ未熟であつたためその中に「利子」を入れてしまったのであるが、のちに利子が信用を「前提」とすることを知らに及んで「資本一般」から「利子」をとり除いた、ということである。すなわち、『資本論』第三巻が「資本一般」の論理の中に包括されるものではない」という氏の「論理構想」のためには「資本一般」のなかに利子が入っていることははなはだ障

害になるが、この障害をマルクスの未熟の責にしてとり除いておられる、という「論理」になるのである。

ところで他方で氏はまたさきのプラン「G」―第三篇「資本と利潤」については、この方は「資本一般」をこえたものであるとされたい。この「G」について氏はいわれる、――「第三篇は既に資本一般の領域を超えて競争・信用を含むに至っている（マルクス曰く、このとき書きつけたプランでは信用ということはそういう文字すらどこにも書いておりません）（三頁）。さきの「資本と利潤、利子」とこの「資本と利潤」とはまったく別物と見ておられるわけである！ところがこのプランではさきに「利子」としていたのに該当するところは「産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」と書かれているといふ差異があるにすぎないのである。

なおつけ加えておくと、このなかから「信用」を探し出すことが藤塚氏にとって必要であるが、以前にはマルクスが未熟で「利子が『信用』を前提する」ということを知らなかったとする藤塚氏にとっては、ここから「信用」を探し出すのはきわめて容易であつたであろうと見ることができよう。というのは、このときにはもうマルクスは成熟していて、利子とあればもうそこには「信用」は「前提」とされていることにならうからである！

このように、藤塚氏は「資本論の論理の全体系を考察」するといわれ、また氏の「見解」を「積極的に論証するため」として「プラン」を列挙して考察しておられるのであるが、その「論証」は事実上、あらかじめ氏の「論理構想」が直観的につくり出されていて、それを基準として、その「論理構想」上支障を来すことをマルクスが記している場合にはこれを取除き、その「論理構想」上必要のあるさいにはそう記していない場合にもそう解するという操作にはかならないのであつて、「論証」とか「立証」とかということとはかかわりがないものと見られるのである。たまたま本文で掲げておいた「資本論」第三部冒頭の文章に関連して藤塚氏が「推論」しておられるので、ここに註を入れたのであるが、以上併せて氏の考証の仕方についてやや立入って考察を加えておいた次第である。前註で見た高木氏の場合もややそうであつたが、ここでは、さきに直観的に結論が形成され、それによつて考証が歪められているという傾向が顕著に認められるのであつて、これは考証の不備というよりは、考証の方法自体に問題があると見受けられるのである。

なお藤塚氏はその後見解を若干修正しておられるようであるが、と同時にそこで高木氏の前掲論文についてつぎのように記しておられるのは、右のことと関連して、まことに興味深い。「高木幸二郎氏の論文は、実の所思いがけなくも、僕の意見と殆んど一致していたので、我が意を得た次第です。……資本論の圏外に残された競争信用等々が「世界市場」を前提とするも

のであることの論証は、まさに僕のしようと思つていたことで、あの論文に賛成です」(原田三郎氏「いわゆる資本論のプランと世界経済論の方法」)によせて——資本論のプランと経済学の方法をめぐる若干の問題——」東北大学『経済学』、昭和二十八年十一月、一二五頁。

終りに、本註のはじめに引用しておいた「資本一般においては、『商品の価値と一致する価格が前提とされている』のであるから、資本論第三巻における生産価格と価値との乖離は、資本一般の論理ではあり得ないことが明らかであろう」といつておられる点について。藤塚氏がこのなかで引用しておられるのは『剰余価値学説史』中の文章の一部分であつて、その全文はつぎのように書かれている。「恐慌が、商品の価値変動と一致しないところの価格変動および価格革命から生じるかぎり、それはもちろん、商品の価値と一致する価格が前提とされている資本一般の考察にさいしては展開されえない」(ディーツ版、第二巻第二分冊、二八九頁、黄土社版訳、二六六頁)。

見られるように、ここで問題としているのは、価値変動と一致しない価格変動であり、これらの価格は市場価格であること、註釈を加えるまでもないであろう。したがつてまたここは、価値を生産価格と置換えても同じなのであつて、要するに、「資本一般」では需要、供給、競争によつて動揺する市場価格は考察外であるから、恐慌がこうした市場価格の変動から生じるかぎりここでは展開されえない、といつていたのである。藤塚氏の云おうとされているようなことをなら裏付けうる文章ではなく、すすんでむしろかえつて、生産価格論を「競争」に当るものと見ようとしておられる氏の「見解」を否定することになる文章なのである。なおそのすこし後のところで、マルクスはつぎのように述べている。——「流通過程または再生産過程の考察にさいしては、われわれはなお価値を問題とすべきで生産価格はまだ問題とすべきでなく、市場価格はなおさら問題とすべきではないから、われわれはまず価値といつておこう」(ディーツ版、三〇〇頁、黄土社版訳、二七五頁)。

* この「産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」と記している「貨幣資本」は、(産業)資本が循環にさいして採る一姿態としての貨幣資本とは異なる「特殊の意味での貨幣資本」(Ⅱ三二二頁)であり、また第三部第五篇で「貨幣資本と現実資本」と章の標題になつて、いる貨幣資本である。資本の他の諸形態から区別されたものとしての貨幣資本(Ⅱ四五八頁)。「利子生み資本すなわち貨幣資本」(Ⅱ五二〇頁)。藤塚氏は、右の「第三編」のプランで「貨幣資本」と記しているから当時の構想では第二篇には「現行第二巻第一編(資本の循環)は含まれないと思われます」(前掲東北大学『経済学』、一二七頁)といつておられるが、これは誤解である。「このことは、第三編(巻)中に『商人資本と貨幣資本』

とあり、明らかに第二巻第一篇の貨幣資本、範疇の確立と相容れないこと……から推定することができません」（同上頁、榜点藤塚氏のもの）。なお高木氏もまたつぎのようにいっておられる、——「ここには『産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本』まではあるが、独自の範疇としての利子生み資本、したがってまた信用業はなお挿入されるに至っていない」（前掲論文、三九頁）。ここで「したがってまた」といわれている点も、「利子が『信用』を前提する」と見る藤塚氏と軌を一にしておられる。

（未完）